

Session I 要旨

民具名称の諸問題

機構共同研究「民具の名称に関する基礎的研究」班 代表 神野 善治

「民具」というと一般にはいわゆる「古道具」を思い浮かべる人が多いかもしれない。しかし、これまで「民具研究」に携わってきた人たちの関心はもっと広い。日常生活のあらゆる場面で使われる道具類から、祭りや儀式のツクリモノなどにおよび、時代は古代から現代まで、地域は日本の農山漁村から都市へ、そして世界の果てまで、あらゆるところにも存在しうるモノが対象になっている。ただ、「どんなモノも関心の対象か」というと、私などはやや限定的に考え、「伝承によって作られ、使われているモノ」つまり「世代を超えて、繰り返し同じカタを継承し、共用されてきたモノ」に主な関心がある。それらは、自然と人間、人間と人間、そして人間とカミの世界を媒介しているモノたちだともいえる。数千年の蓄積の中で人間が作り出し、使い続けてきたモノならば、世界の各地に、国境を越え、民族や時代を超えて共通する民具が存在しうる。それでいて民具の世界は、地域性があり、個性があって、ひとつひとつの個別のあり方が面白い。

本シンポジウムで、このセッションが話題にする「民具の名称」のテーマも、極めて個別的、地域的な面白さがあり、そこから生じた疑問を数多くの事例から帰納的に解決できる可能性が秘められているだろう。また、万物を対象にした抽象的な思考を楽しみながら、身近で具体的なモノに即して話題を展開できる分野ではないだろうか。

「民具の名称」に関する基礎的な問題は、研究の方法上の問題として、民具研究が組織的に行われるようになった当初（1970年代半ば）から話題になっていた。日本常民文化研究所の中心的な役割を担われていた河岡武春氏が若手研究者に熱心に語っていた姿が思い出される。民具研究はあたかも「分母も分子も違う分数を並べて比較している」段階ではないかと。全国的視野で比較研究を展開させるには、形態、素材、機能などが共通する一群の民具を特定の名前で呼ぶこと、すなわち植物学などの「学名」に相当する「標準名」が必要で、その基盤として「標準民具」も設定されることも望ましいと。しかし、民具研究は始まったばかりで、民具全般を包括的にとらえるだけの情報は、まだ集積されておらず、若干の試みがあったものの、組織的な展開には至らなかった。研究者が対象とするモノをどう呼ぶのか。それはおそらく個別研究の積み重ねで、少しずつ構築され定まっていくのが順序ではないかと私なども考えた。あるいは、モノの名前の本質が理解できたら、「標準名」なるものの設定なども、元来、不可能な課題かもしれないとさえ思った。

以来30年余、全国の博物館、資料館の調査収集活動や有形民俗文化財の指定などが進展して、全国に数十万点を越える膨大な民具とその情報が蓄積されてきたが、あいかわらず、それらのリストを見ると「標準名」の項目は空欄だったり、思い思いの名付けがなされていたりする例が多い。それら名称から資料を特定する作業は至難の業なのだ。収集された民具が有効に活用されるためにも、また今後、民具研究が実りある成果を生み出せるためにも、少なくとも同じ土俵で相撲を取れるように、たとえそれが「標準名」といわなくても、互いに同じ対象を探し出せる「共通の名称」があると便利なことに異論はないだろう。個別研究を尊重しつつも、全国の同志の力を得て、一気呵成に集中的な検討が行えれば、ある程度の標準的な民具を網羅する民具名リストを作ることは可能ではないだろうか。

そこで、本プロジェクトでは5か年計画を立てた。最初の1年は、既存の研究報告類から民具の地方名（方言名）を抽出し整理するという地味な基礎的作業を行い、その上で、分野ごとに基本的な民具を抽出して、それぞれの地方名を当てはめる作業を行ってきた。その経過とそこから生まれた具体的な課題を研究班のメンバーから発表し、今後の展開を考える機会としたい。

人間の暮らしのあり方、考え方などを探る上で、民具の世界が、新しい課題発掘の有力な手がかりとなり、異文化間の共通認識の出発点ともなる魅力あるテーマであることを、若い世代に紹介し、また世界に発信できる機会となれば幸いである。